

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 29 日現在

機関番号：53701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770223

研究課題名(和文) 英語学習者の多読に対する読書態度 態度因子の内部構造の記述とモデル構築の試み

研究課題名(英文) Affective components underlying EFL learners' extensive reading: Examining the components' inner structures and predicting extensive reading behaviors

研究代表者

種村 俊介 (TANEMURA, Shunsuke)

岐阜工業高等専門学校・その他部局等・准教授

研究者番号：70435428

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は学習者が多読に対してどのような態度を有し、いかなる要因が多読に影響を与えるかを解明することであった。そのために、態度を5つの概念で捉え、それらの因子構造を調べ、多読との関係を調査した。またモデルを構築し、態度と多読との因果関係を検証した。

その結果、態度は5つの構成要素から成り、それぞれが因子を有し、その内の幾つかが、読語数や読書時間と有意な相関関係にあることが示された。さらに読書時間を行動指標とし、認知的態度と感情的態度を1つにまとめたモデル構築によって、(認知・感情的)態度 意図 多読(読書時間)というパスが最も強く多読行動を説明することが実証された。

研究成果の概要(英文)： The current research examined attitudinal components toward extensive reading and their relationships to L2 learners' English extensive reading (ER) performance both in and outside of their English classes by conducting factor analysis and structural equation modeling. The participants were students aged between 15 and 16 years old, who were completing a five-year program at a national college of technology. Data were obtained from two major sources: a questionnaire graded on a Likert scale that was administered during the study's tenth week, and through extensive performance review gauged by the number of words read and the duration of ER between the eleventh and twentieth weeks.

The results revealed that the attitude components consist of five items and each of which is multidimensional and that mainly positive affective feelings towards extensive reading facilitate the learners' extensive reading performance.

研究分野：英語教育学、第二言語習得研究

キーワード：多読 読書態度 情意要因

1. 研究開始当初の背景

多読はインプット量を増やし(門田他,2010)、単語認知力や統語解析力の自動化を促進し、読みの流畅さを高め(門田・野呂,2004)、語彙知識の獲得(付随的語彙学習)にも貢献する(Grabe, 2009; Pigada & Schmitt, 2006)など、多読の言語面への効果が明らかにされてきた。また、情意へのプラスの影響も指摘されてきた(Day & Bamford, 1998; Grabe, 2009; 門田他, 2010; Yamashita, 2013)が、情意面の研究は遅れている(Yamashita, 2007;2013)。

さらにこれまでの多読の先行研究は、多読の効果に焦点を当てた研究が主で、逆の視点からのアプローチが欠けている。研究の遅れが指摘されている情意面について言えば、多読が情意に及ぼす面に焦点を当てる研究だけでなく、情意が多読を規定する面に焦点を当てる研究もあり得る(秋田, 1998)が、この視点からの研究はほとんど行われていない。この視点の研究から得られる示唆は、多読を促進する情意要因についての理解を深め、教師にとって、指導をより効果的に行うための必要不可欠な知見となる。この視点での限られた研究には Yamashita (2004)、Takase (2007)、Fujita and Noro (2009)がある。

Yamashita (2004)は、英語の読書に対する(認知的・感情的)態度と多読の関連を調査し、大学生の授業内外の多読を規定する要因は、「快適さ」と「自己認識」であるとした。Takase (2007)では、英語の読書に対する動機づけと授業外多読の関連が調査され、「L2読書に対する内因性動機づけ」と「母語読書に対する内因性の動機づけ」が高校生の授業外での多読に影響を与える要因であると結論付けられた。Fujita and Noro (2009)は、Takase(2007)と同じく、動機づけと多読の関連を調査し、動機づけは授業内多読にまったく影響を与えず、多読開始前の「英語力」のみが多読に有意な影響を与えることを示した。

同じ高校生を対象とした、Takase (2007)と Fujita and Noro (2009)のこの結果の相違は、授業外と授業内では、多読を促進する要因が異なることが原因によるかもしれないが、さらなる調査が必要であることを示している。また、Takase (2007)では多読を有意に促進する2つの要因は、重回帰分析の結果、多読行動のわずか6%しか説明し得ないことがわかった。この結果は、動機づけ以外の要因が多読行動を主に規定する可能性が高いことを示している。

Yamashita (2004)が用いた態度という概念と読書行動との関連を調査する研究は、母語による読書の分野で盛ん(例えば Stokmans, 1999; Miesen, 2003; van Schooten & de Gloppe, 2002)であり、その代表的な研究が、van Schooten and de Gloppe (2002)である。彼らは、読書に対する態度を、行動を規定する主要因の一つと捉える Ajzen (1991)の計画

的行動理論: Theory of Planned Behavior(以下 TPB)を理論的基盤とし、青年期文学の読書に対するオランダ人生徒(13-15 歳)の読書行動と情意要因との関連を調査した。Ajzen の TPB は、動機づけや不安、主観的規範や行動統制感をも含み、より包括的にリテラシーに対する心理状態を捉えられると考えられる。

van Schooten and de Gloppe (2002)は TPB では1つとされる態度を、さらに「認知的態度」と「感情的態度」の2つに分け、読書行動を説明する概念を、認知的態度、感情的態度、主観的規範、行動統制感、意図の合計5つの概念で捉えた。そして5つの概念を構成するそれぞれの信念を測定するための、5件法のリカルトスケールによる質問紙を作成し、図1の読書行動モデルを構築し、読書に対する「認知的態度」と「感情的態度」が読書「意図」を形成し、その「意図」が読書行動に大きな影響を与えることを実証した。

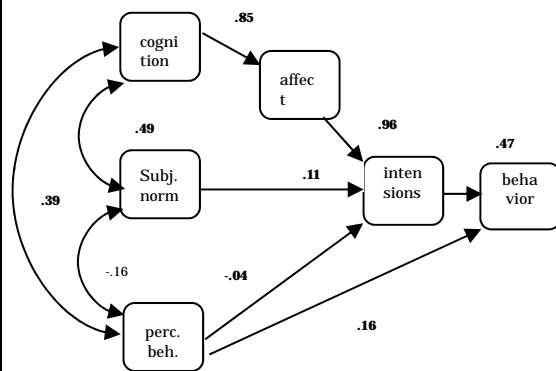


図1 van Schooten and de Gloppe (2002)のパスモデル

彼らが理論的基盤とした TPB は、社会心理学の分野で、態度と行動の関連を調査する研究に利用され、有効性が実証されている(Armitage & Conner, 2001)。外国語学習の分野では、第二言語の読書態度の習得と発展モデルを Day and Bamford (1998)が唯一提案しているが、実証されたモデルではない。

Yamashita (2004, 2007)では、母語の読書と英語の読書に対する読書態度の関連性が実証されており、母語の読書行動モデルが英語の読書にも応用できる可能性が示唆されている。母語の読書に対する情意要因と読書行動との関連の知見を利用することで、英語学習者の多読に対する情意要因と行動との関連が明らかになる可能性がある。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では、読書態度を、Ajzen (1991)の TPB を理論的基盤として、van Schooten and de Gloppe (2002)によって調査された5つの構成要素: 「認知的態度」、「感情的態度」、「主観的規範」、「行動統制感」、「意図」で捉え、以下の4つを調査・検証することを目的とした。

- (1) 5 つの構成要素がいかなる潜在因子で構成されているか探索的因子分析により探る。
- (2) 得られた潜在因子が妥当であるか検証的分析により実証する。
- (3) 実際が多読行動と各潜在因子との関係について調査する。
- (4) 以上の結果を基に、TPB に基づいた多読に対する日本人英語学習者の読書態度モデルを構築し、多読に対する読書態度と多読行動の因果関係を実証する。

3. 研究の方法

(1)被験者

工業高等専門学校 の 1 年生 209 名が研究に参加した。内 3 名は親が英語母語話者であるためデータから除外し、206 名を分析対象者とした。被験者が週 1 回受講する英語の授業科目の最初の 15 分間で、被験者は 4 月から 2 月の前期 10 回と後期 10 回の合計 20 回、総時間合計 300 分間授業内で多読を行った。また、図書館や調査者の研究室の多読図書を借りて授業外で 1 冊以上読むという課題が質問紙調査前に 1 回と後に 3 回の計 4 回課された。この課題の期間外も、希望者は調査者の研究室や図書館の図書を借りられた。

被験者には、読書後、読書記録手帳(古川, 2006)に記録を残すことのみが課された。記録の方法として、「図書を一冊読み終えるごとに、読んだ月日、タイトル、シリーズ/出版社、読みやすさのレベル、読語数とその時点の累計読語数、読書時間(分)とその時点の累計読書時間(分)、図書の評価、感想を正確に記入するように」との指示が与えられた。読書記録手帳は定期的に回収され、点検が行われた。

(2)材料

予備調査(種村, 2012; 2013)で使用した質問紙の質問項目に新たな質問項目を加え、合計 132 項目から成る質問紙の妥当性と信頼性の検証を行い、最終的に 110 の質問項目で構成される質問紙を完成させ、それらを調査に用いた。110 の質問項目は、TPB の構成要素(認知的・感情的態度、主観的規範、行動統制感、意図)のいずれかにあてはまる質問項目群であった。

(3)手続き

授業内多読 10 回終了時点の 10 月に英語の授業内で質問紙調査が実施された。被験者には、結果は成績に一切関係ないことが伝えられ、時間は 40 分程度を要した。回答は「あてはまらない(1 点)」から「あてはまる(5 点)」までの 5 件法で求めた。逆転項目への回答は、1 点は 5 点に、2 点は 4 点に置き換えて集計された。以降では、置き換えて集計された結果を示し、その結果を基に分析結果を論ずる。

(4)分析方法

多読の読語数と読書時間、各質問項目への

回答に関して、記述統計量(度数、範囲、平均値、標準偏差)を算出した。そして、TPB の各構成要素の潜在因子を探るために因子分析が実施された。また、潜在因子を構成する質問項目の信頼性係数(クロンバック α)を算出し、共分散構造分析(構造方程式モデル SEM: structural equation models、以降 SEM)を行い、認知的態度、感情的態度、主観的規範、行動統制感、意図、それぞれの因子構造モデルを検証し、パス図によって図示した。さらに、認知的態度、感情的態度、主観的規範、行動統制感、意図を独立変数にして、多読行動を予測する多読行動モデルを検証した。多読行動モデル全体の評価のため、カイ 2 乗検定、適合度指標 (RMSEA, GFI, CFI) の確認を行い、それらの結果から、多読に対する日本人英語学習者の多読行動モデルを構築した。分析には、SPSS Base と AMOS を使用した。

4. 研究成果

(1)研究課題 1 と 2

本研究の 1 つ目の課題である、半年間の多読を経験した日本人英語学習者の多読に対する読書態度を、Ajzen (1991)の計画的行動理論を理論的基盤として母語の先行研究(van Schooten and de Glopper, 2002)を踏まえ、5 つの構成要素(認知的態度、感情的態度、主観的規範、行動統制感、意図)で捉え、それぞれがどのような内部構造を有するかを探索的因子分析により探ること、さらに、2 つ目の課題である得られた因子の妥当性の検証を SEM により行った。その結果、5 つの構成要素は、以下の内部構造を有し、いずれも多面的であることが明らかとなり、SEM によるモデルの妥当性の検証の結果、いずれの構成要素の因子モデルも妥当であることが実証された。

5 つの構成要素の内部構造

認知的態度：
「意欲知的」、「読解力」、「実利」
感情的態度：
「愛好」、「不安」、「心地よさ」、「煩わしさ」
主観的規範：
「規範的信念」、「他者期待」
行動統制感：
「英語力」、「時間」、「資質」、「教師支援」、「授業外」
意図：
「独行」、「関わり」

(2)研究課題 3

3 つ目の課題は、上の潜在因子と多読行動との関連を調べることであった。そこで、16 の因子の各スコアを、それぞれの因子を構成す

る質問項目に対する被験者の1から5までの回答を合計したものをを用いた。また多読行動の指標として、授業内多読11回から20回終了時点での読語数と読書時間(分)に、同期間中に行った授業外での多読の読語数と読書時間(分)を加えた総読語数と総読書時間を用いた。そして、それぞれの数値の相関係数を算出した。その結果、多読の読語数と読書時間(分)といずれも有意な相関関係があることが示されたのは、以下の5因子であった。

読語数と読書時間と有意

感情的態度： 「愛好」「煩わしさ」
 行動統制感： 「資質」
 意図： 「独行」「関わり」

また、読語数とのみ関連があった因子は、次の3因子であった。

読語数と有意

感情的態度： 「不安」「心地よさ」
 行動統制感： 「英語力」

さらに、読書時間とのみ有意な関連があったのは、次の1因子であった。

読書時間と有意

主観的規範： 「規範」

以上の結果は、多読に対し「愛好」を感じる学習者や「煩わしさ」を感じない学習者、読書に対する「資質」を有すると感じる学習者、そうでない学習者に比べ多読における読語数と読書時間ともに多くなる傾向にあることを示唆している。

また、多読図書を読むことに対して「不安」を感じない学習者、「心地よさ」を感じる学習者、多読図書を読むための「英語力」を有すると感じる学習者は、そうでない学習者に比べ読語数が多くなる傾向にあることを示唆している。

加えて、多読図書を読むべきだという「規範」意識を持つ学習者は、そうでない学習者に比べ、多読図書の読書時間が多くなる傾向にあることを示唆している。

(3)研究課題4

4つ目の課題として、計画的行動理論の構成要素を独立変数にした多読行動モデルが構築された。さらに、構築されたモデルのデータへの適合度と構成要素間の関係性に付

いて、SEMを用いて検証された。具体的には、各構成要素の各因子の因子得点を算出し、それぞれ合計したものを各構成要素の観測変数として、パス解析により、モデル構築の検証が行われた。多読の指標としては、授業内多読11回から20回の期間中の授業内外で行われた累計読語数と累計読書時間、累計読語数、累計読書時間の3種類が用いられた。その結果、下の図1のとおり、累計読書時間を多読行動指標とし、認知的態度と感情的態度それぞれの因子得点を合計して、態度を1変数にまとめるというAjzen (1991)本来の計画的行動理論モデルを基にした多読行動モデルが最良であることが実証された。

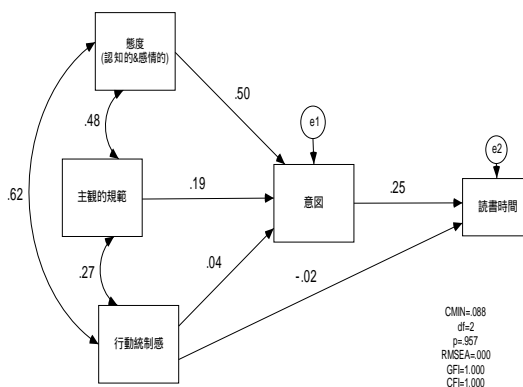


図2 多読行動モデル

この結果は、オランダ人生徒を被験者として、母語の青年期文学の読書に対する態度及び情意要因と読書行動との関連を、計画的行動理論を基にモデル化した van Schooten and de Gloppe (2002)を支持している。本調査の結果から、母語と外国語を問わず、読書行動は計画的行動理論によるモデル化が可能であり、読書行動を十分に説明できる可能性があることを示したと言える。

一方で、厳密に言えば、van Schooten and de Gloppe (2002)のモデルでは、読書行動に影響を最も及ぼすのは、図1で示したとおり、「認知的態度」「感情的態度」「意図」「読書行動」のパスであったのに対し、本調査では、図2のとおり、「態度(認知的と感情的)」「意図」「多読行動」であった。母語では、読書に対する認知的態度である読書がもたらす効果や利益の認識が、読書に対する「好き、おもしろい」といった感情にプラスの大きな影響を及ぼし、その感情が、読書を行おうとする意図に影響を与え、読書行動を促すことが示された。英語学習者の多読においても、彼らと同じモデルの構築が試みられたが、データとモデルの適合度が悪く、妥当ではないことが示された。多読においては、認知的な態度と感情的な態度を一つの態

度としてまとめ、多読の評価、効用、多読に対する好き、嫌いの感情といった態度全体が意図に影響を及ぼすことを仮定した方が、妥当であることが実証された。この点が、母語の読書との違いと考えられる。研究課題3で検証された各構成要素の潜在因子と多読行動との関連からは、認知的態度の潜在因子である「意欲知的」因子、「読解力」因子、「実利」因子は、いずれも読語数と読書時間との有意な相関が見られず、感情的態度の潜在因子である「愛好」因子、「不安」因子、「心地よさ」因子、「煩わしさ」因子はいずれも、読語数或いは読書時間と、或いはそのいずれとも有意な相関関係が見られた。このことから、認知的態度よりも感情的態度が意図により強く影響を与え、多読行動を促す可能性が窺われる。

構築されたモデルからは、「態度(認知的と感情的)」「意図」「多読行動(読書時間)」というパスが最も強く多読行動を説明することが明らかにされた。

図2が示すとおり、態度(認知的と感情的)から意図へのパス係数(.50)と意図から読書時間のパス係数(.25)が、図1の母語での読書行動モデル(認知的態度 感情的態度(.85)、感情的態度 意図(.96)、意図 行動(.47))に比べて、本調査の多読行動モデルは弱い値であることが明らかになった。多読の効果を認識し、多読を楽しんでいると感じても、母語に比べて、それらの心理傾向が、多読図書を読もうとする意図に結びつきにくく、意図に結びついたとしても、母語の読書に比べて、実際の読書行動へと至りにくいことを示している。この傾向が、英語学習者の英語の読書の特徴であると思われる。おそらく、外国語である英語での読書であるため、それらのパスがスムーズに通らない阻害要因があることが予想される。或いは、それらのパスをよりスムーズにするための何らかの要因が必要であるのかもしれない。これらの要因の解明が今後の課題であると言える。

さらに、図1の母語の van Schooten and de Glopper (2002)のモデルとの違いについて言えば、彼らのモデル(.11)に比べて、主観的規範から意図へのパス(.19)の影響が僅かながら強かったことが挙げられる。これは、本調査が授業内で主に行われた読書であるため、多読図書を読むべきだという規範意識が強いことや重要他者の多読を読むことの期待を強く認知していることが、母語の読書に比べほんの僅かであるが意図に対してより強い影響を及ぼしたと考えられる。

加えて、態度と主観的規範、態度と行動統制感、主観的規範と行動統制感の構成要素間の相関関係について考察する。van Schooten and de Glopper (2002)のモデルとの類似点としては、彼らのモデルにおける認知的態度と主観的規範の相関(.49)と本調査の態度(認知的と感情的)が同程度の相関(.48)を示

していることである。このことは、母語と英語を問わず、読書の効用を認識し、或いは、読書に対する感情がプラスであれば、読書を行うべきだと言う規範意識が強い傾向にあることを示している。

一方で、本調査での態度(認知的と感情的)と行動統制感の相関(.62)ほど、van Schooten and de Glopper (2002)のモデルの認知的態度と行動統制感の相関(.39)が強くなかったことも指摘されるべきである。これは、英語の多読においては、母語での読書に比べて、意図、さらには意図を経由して読書行動に最も影響を及ぼす重要な構成要素である態度に、行動統制感がより影響力があることを示していると考えられる。英語の多読では、読書を行う力(英語力)や資質が備わっていたり、読書を行う時間や読書を行うための支援(適切な図書の入手)が得られる状況にあるという認識が強いほど、読書を肯定的に捉えようとする態度を有していることを示しており、納得できる結果である。van Schooten and de Glopper (2002)の被験者は13-15歳であり、その年齢の者にとって、本の入手方法に対する知識、理解(読解)力や集中力の有無などの行動統制感が、母語での読書には外国語である英語による多読ほど影響を与えないことが、容易に想像できるからである。

また、主観的規範と行動統制感の相関が本調査のモデルでは、.27で有意な値であったのに対し、母語のモデルでは、-.16という有意でないマイナスの値であった。この結果も、英語の読書における行動統制感の重要性を示していると解釈できる。よって、多読行動を促すためには、認知的・感情的態度のみならず、行動統制感にも注意を払う必要があること示唆している。

続いて、読語数よりも読書時間を読書行動の指標にした場合が最もモデルとデータの適合度が良好であった点について考察を加える。van Schooten and de Glopper (2002)の母語の読書行動モデルにおいて、読書時間が読書行動を表す指標とされていたことから、読書時間は多読行動の指標としても適切であるかが本調査において検証されたのであるが、主な英語の読書の先行研究である Yamashita (2004)では読書頁数が、Takase (2007)では読語数と読書冊数、Fujita and Noro (2009)では読語数が採用され、読書時間を採用した先行研究はほとんど存在しない。唯一 Nishino (2007)において、読語数と共に、読んだ本の語数をその本を読むのにかかった時間で割った読書率(reading rate)という指標が用いられているだけである。読書時間が多読行動の指標として用いられている先行研究がほとんど見られないのであるが、調査者は、英語授業内外での学習者への多読指導を通して、読語数に加えて、読書時間も多読行動の指標として、有効ではないかと感じていた。特に初級英語学習者を被験者とする場合は読語数と共に読書時

間も指標として用いられるべきであると思われる。なぜならば初級英語学習者が多読を始めた初期段階では、継続的に授業内外で熱心に多読を行う学習者の中に、読語数があまり伸びない学習者が多く見られるからである。このような学習者は、絵が多く描かれ、僅かな語数の英語で表現される Leveled Readers を熱心に何冊も何冊も楽しみながら読み、少しずつ少しずつ図書レベルを上げていく傾向にある。読語数を指標とするだけではこのような学習者の行動を捉えられない。本調査によって、初級英語学習者を対象にした場合、計画的行動理論を基にした行動モデルにおいては、読書時間が有効な多読行動を示す指標であることが示唆されたと言えよう。英語の多読において、読語数は学習者の「能力」を読書時間は多読に対する関わり合い、つまり「行動」を表していると言えるかもしれない。

(4)今後の研究課題

本調査では、授業内多読 10 回時点の質問紙調査と 20 回時点までの多読行動を数値化し、モデルの構築を試みたが、その時点を変えて調査を行いたい。調査時点や期間が異なる調査を行うことで、学習者の多読に対する情意への理解がさらに深まることが期待できる。

また、van Schooten and de Gloppe (2002)の母語の読書行動モデルと本調査で得られた多読行動モデルとの相違点について、被験者へのインタビューなどの質的調査によって検証することである。例えば、図 1 の母語の読書行動モデルでは、認知的態度から感情的態度へのパス、感情的態度から意図へのパス、意図から実際の読書行動へのパスが、それぞれ 85%、96%、47%と強い予測力を示したのに対し、本調査の多読行動モデルでは、(認知的・感情的)態度から意図、意図から読書行動へのパスがそれぞれ 50%と 25%と予測力が母語の先行研究に比べ弱い値であった。この結果は、学習者が、多読の効果を認識し、多読が面白いと感じていても、読もうと思えない、或いは、読もうと思っても、読むという行為に簡単に結びつかないことを示している。なぜこのような傾向になるのかという疑問について、被験者への面談・インタビューによって、明らかにしたい。量的・実証的な研究では捉えられない現象を、質的な調査方法を用いることで、その実態を明らかにできればと考える。そうすることで母語での読書行動と英語の多読行動の相違が明らかになり、多読の情意面に対する理解が深まることが期待できる。

最後に、本調査は、Ajzen (1991)の計画的行動理論を理論的基盤として、多読行動モデルの構築を試みたが、今後、さらにサンプル数を増やし、質問紙の測定精度をより高めるなどのさらなる改善を行うことで、計画的行動理論を理論的基盤としながらも、英語学習者により特徴的な多読行動モデルの構築が可能かの検証を継続していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔その他〕

名古屋大学学術リポジトリ

<http://ir.nul.nagoya-u.ac.jp/jspui/bitstream/2237/21227/1/%e7%94%b210781%e4%b8%bb%e8%ab%96%e6%96%87.pdf>

本研究の成果は 2014 年 11 月に名古屋大学国際開発研究科に提出した博士論文：『英語学習者の多読行動を規定する構成要素の内部構造の記述と多読行動モデル構築の試み』にまとめられた。

6. 研究組織

(1)研究代表者

種村 俊介 (TANEMURA Shunsuke)

岐阜工業高等専門学校・一般科目・准教授
研究者番号：70435428

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし